

## 最近の中国映画に描かれた日本像・日本人像について (1)

—序, および『非诚勿扰 (狙った恋の落とし方)』『色 | 戒 (ラスト, コーション)』—

近 藤 泉

### 序

#### I

中国映画に描かれた日本像・日本人像は、中国の人々の日本・日本人についての見方を一定程度反映したものであるとともに、また、それに影響を与えてゆくものでもある。

本論文においては、2005年以降の作品を対象とし、中国映画は、どのように日本・日本人を描いているか、中国（大陸）の人々に日本・日本人についてどのような情報・イメージを与えるものとなっているか、といったことを明らかにしたい。基本的に大陸の状況を理解するために分析を行うこととする。

具体的には、

①まず、2005年以降の作品に限り、日本ないし日本人を描いた映画を一つ一つ取り上げ、そこに描かれた日本像・日本人像についてできる限り具体的・客観的に分析する。

その際、中国（大陸）の人々は、香港や台湾（とりわけ香港）の映画をよく見るし、中華圏の映画界は、その内部において、もはや深い協力関係・交流関係、というかむしろボーダレス化ともいえる状況すら起こっている（とりわけ大陸と香港の間はボーダレス化している。）ので、大陸の状況を知る場合にも、香港や台湾の映画を考察の対象から外すのは、現実的ではない。したがって、

大陸の多くの人々に見られた香港・台湾の映画、

大陸と、香港または台湾の共同制作の映画

も、本論文の扱う対象とする。

ただし、台湾の人々の日本人観と大陸の人々の日本人観との間には、かなりの違いもある（例えば、台湾で大ヒットした『海角七号 (海角七号/君想う, 国境の南)』は、それゆえに大陸で批判されることにもなった。）し、香港の人々の日本人観と大陸の人々の日本人観も、むろん同じではない。本論文は、あくまでも大陸の人々の日本人観や、映画が大陸の人々に与える日本・日本人についての情報を明らかにするための論文である。そこで、本論文においては、香港や台湾で制作されたもののうち大陸で十分な興行収入を得られなかった作品は省き、

a 大陸での興行収入が中国映画全体の興行収入ランキング中、各年度のベストテンに入る、日

本ないし日本人を描いた中国映画（大陸映画・香港映画・台湾映画，あるいはそれらの合作，ないし第三国との合作などをすべて含む。）

及び

b aには入らないが大陸で作られた（他との共同制作作品をも含む。）、日本ないし日本人を描いた作品

のみを分析の対象とすることにする。

a 2005年度以降の各年度，大陸での興行収入が中国映画全体の興行収入ランキング上位10位までに入る中国映画（大陸映画・香港映画・台湾映画，あるいはそれらの合作，ないし第三国との合作などをすべて含む。）を以下に挙げる。なお，日本でも上演・発売されるなどして日本語による正式な題名がある場合は，それが中国語による題名と異なる（単なる字体の相違をも含む。）場合に限り，（ ）内にそれを記した。

2005年度ベストテン<sup>1)</sup>

- 1 无极 (PROMISE プロミス) (中・日・韓) 2億1千万元
- 2 THE MYTH 神话 (THE MYTH 神話) (香・中) 9100万元
- 3 七剑 (セブンソード) (香・中・韓) 8345万元
- 4 头文字D (頭文字D) (香・中) 6300万元
- 5 情癡大圣 (香・中) 5000万元
- 6 韩城攻略 (ソウル攻略) (香・中) 4100万元
- 7 千里走单骑 (单騎, 千里を走る) (中・香・日) 3000万元
- 8 如果・爱/Perhaps Love (ウィンター・ソング) (香・中) 2900万元
- 9 任长霞 (中) 2600万元
- 10 生死牛玉儒 (中) 2000万元

2006年度ベストテン<sup>2)</sup>

- 1 满城尽带黄金甲 (王妃の紋章) (香・中) 2億4千万元
- 2 夜宴 (女帝 エンペラー) (中・香) 1億3千万元
- 3 霍元甲 (SPIRIT スピリット) (香・米) 1億元
- 4 宝贝计划 (ベイビープロジェクト) (香・中) 9200万元
- 5 墨攻 (中・日・韓・香) 6100万元
- 6 伤城 (傷だらけの男たち) (香) 5800万元
- 7 龙虎门 (かちこみ ドラゴン・タイガー・ゲート) (香) 5100万元
- 8 云水谣 (台) 3200万元
- 9 疯狂的石头 (クレージーストーン) (中・香) 2300万元
- 10 东京审判 (中) 2000万元

2007年度ベストテン<sup>3)</sup>

- 1 投名状 (ウォーロード/男たちの誓い) (香・中) 1億5千万元

最近の中国映画に描かれた日本像・日本人像について (1)

- 2 色・戒 (ラスト・コーション) (台・米・中) 1億2千万元
- 3 集结号 (アセンブリー) (中) 7000万元
- 4 门徒 (プロテージ 偽りの絆) (香) 6500万元
- 5 满城尽带黄金甲 (王妃の紋章) (香・中) 6000万元
- 6 伤城 (傷だらけの男たち) (香) 4000万元
- 7 导火线 (香・中) 3400万元
- 8 不能说的・秘密 (言えない秘密) (台) 3400万元
- 9 男儿本色 (インビジブル・ターゲット) (香・中) 3400万元
- 10 命运呼叫转移 (中) 3000万元

2008年度ベストテン<sup>4)</sup>

- 1 赤壁 上 (レッドクリフ Part I) (中・香・日・台・韓) 3億2千万万元
- 2 非诚勿扰 (狙った恋の落とし方) (中) 3億元
- 3 画皮 (中・香・シンガポール) 2億3千万万元
- 4 功夫之王 (ドラゴン・キングダム) (米・中・香) 2億元
- 5 长江7号 (ミラクル7号) (香・中) 1億9千万元
- 6 梅兰芳 (花の生涯 梅蘭芳) (中) 1億1千万元
- 7 大灌篮 (カンフーダンク! 香港・台湾名: 功夫灌篮) (台・香・中) 1億1千万元
- 8 叶问 (香・中) 8800万元
- 9 见龙卸甲 (三国志) (香・中) 6500万元
- 10 江山美人 (エンプレス—運命の戦い—) (中・香) 4300万元

2009年度ベストテン<sup>5)</sup>

- 1 建国大业 (中) 4億2千万元
- 2 赤壁 下 (レッドクリフ Part II) (中・香・日・台・韓) 2億6千万万元
- 3 三枪拍案惊奇 (中) 2億4千万元
- 4 十月围城 (香・中) 2億3千万万元
- 5 风声 (中) 2億2千万万元
- 6 南京! 南京! (中) 1億7千万万元
- 7 疯狂的赛车 (中) 1億1千万万元
- 8 游龙戏凤 (香・中) 1億元
- 9 大内密探零零狗 (香) 1億元
- 10 非常完美 (中・韓) 9600万元

以上のうち、2005年の『头文字D (頭文字D)』『千里走单骑 (単騎, 千里を走る)』、2006年の『靈元甲 (SPRIT スピリット)』『東京审判 (東京審判。東京裁判の意)』、2007年の『色・戒 (ラスト・コーション)』、2008年の『非诚勿扰 (狙った恋の落とし方)』『梅兰芳 (花の生涯 梅蘭芳)』『叶问 (葉問)』、2009年の『风声 (風声)』『南京! 南京!』において、日本ないし日本人が描かれている。

b)においては、どの作品を取り上げるかはなお未定だが、例えば、『恋愛地图 (关于爱) (アバ

ウト・ラブ』(中台日) 上海篇(中国が制作を担当した部分) 2005・『吳清源(呉清源 極みの棋譜)』(中日) 2006・『男才女貌』(中香) 2007・『夜上海』(中日) 2007といった作品を扱う予定である。中国が共同制作国の一つではあってもその中心となる制作国とはいえない作品(例えば『伯爵夫人(上海の伯爵夫人)』2005, 『拉贝日记(John Rabe)』2009など)は、ここでは取り上げない。

ただし、bで取り上げる作品については、中国(大陸)におけるその人気・評価がどのようなものだったか(、そして場合によっては、それがなぜか)ということをも含めて分析する必要がある。

これらの作品において日本ないし日本人がどのように描かれているか、一本一本、作品ごとに具体的に見てゆくこととする。

②そして更に、①の結果をまとめることにより、中国映画は、どのように日本・日本人を描いているか、中国(大陸)の人々に日本・日本人についてどのような情報・イメージを与えるものとなっているか、ということをも明らかにする。

本論文の上記つまりⅠの部分においては、2005年以降の作品のみを分析の対象とする。ほぼ反日デモ以降に公開された映画を扱うということになるが、そこに必ず線を引かなければならないという格別の理由があるわけではない。時間が許せば、他の論文において、2000年以降(中国でいうところの21世紀)の作品をも対象として扱い、より広く多くの作品を分析の対象としたいと考えているが、とりあえずこの論文においては、2005年以降の状況に限定して分析をすることにする。

なお、1990年代前半以前の状況については、『アジア映画に見る日本 Ⅰ中国台湾香港編』門間貴志、社会評論社、1995などにおいても、かなり詳しく記されている。

## Ⅱ

中国映画(このⅡにおいては、他との合作をも含め、大陸が制作に関わっているものに限定する。)には日本との協力関係や文化・人材面での交流のもとに制作された作品がある。それは、

a 日本の作品が原作として使われている作品

b 日本企業が制作に関わったり、日本の人材がスタッフ・俳優などとして制作に参加したりした作品

である。

そうした、映画界における日中の協力関係や文化・人材面の交流などの状況がどのようなものであったかという事についても、見ていきたい。この件については、ある程度期間の幅を持たせて見ていかないと全体の状況が見て取りにくいので、2005年以降のみではなく2000年以降(つまり中国でいうところの今世紀)を対象として見てゆくこととする。

なお、本論文は、今回1回で終わるのではなく、数回に分け、二三年ほどかけて『名古屋学院大学論集 言語・文化篇』及び『名古屋学院大学論集 人文・自然科学篇』に連載する形で発表する予定である。(そのため、2010年度において大陸での興行収入が中国映画全体の興行収入ランキング上位10位までに入る中国映画も追加して扱う予定である。)

## 本論

### I ①a

まず、序のI ①aに該当する映画を、日本・日本人をどう描いているかという観点から一本ずつ分析してゆくこととする。第1回目の今回はとりあえず『非诚勿扰(狙った恋の落とし方)』と『色|戒(ラスト, コーション)』の2本を扱う。なお、これから数回にわたる連載で扱う映画の順番に関しては、格別意味や意図があるわけではない。筆者が十分に書き上げたものから順次発表してゆくこととする。

#### 1 『非诚勿扰(狙った恋の落とし方)』(122分)

大陸映画(笑笑役は、台湾の舒淇)。2008年(日本でも、2010年2月から北海道で上演。)

監督・脚本: 馮小剛

以下の( )内の数字は、そのシーンが映画の何分目に出てくるかを示す数字。

### 内容

主人公秦奮は、ネット上に結婚相手を求めるという広告を出し、様々な女性と会うが、いくら多くの相手と会っても、これという相手が見つからない。ただ、見合いに現れた女性の一人梁笑笑は、既婚男との恋愛に傷つき疲れ、男と別れる決心をし、男との思い出の地である北海道へ心の整理の旅行に同行してくれないかと秦奮を誘う<sup>6)</sup>。二人は北海道(道東)に行く。秦奮の旧友で北海道に住んでいる鄔が案内役となり、3人で道東旅行を続ける。秦奮の人間性と自分への思いに慰められることもあった笑笑だったが、別れた男への思いが断ち切れず、ついにオホーツク海に身を投げる。九死に一生を得た笑笑は、別れた男への思いを断ち切れ、献身的に看護する秦奮を真に愛するようになる。

映画の後半68分目から113分目までは北海道が舞台である。当然そこで日本人も多く登場する。

### 映画の影響による道東への中国人観光客の急増

この映画のヒットにより中国から北海道・道東への観光客が激増したことは、よく知られている。

そもそも2008年まで、中国人(大陸)の観光客は東京から関西(特に大阪・京都)にかけてのゴールデンルートに集中しており、他地域への観光客は非常に少なかった。(ちなみに、香港

や台湾からの観光客は、もともと北海道にも一定の割合の観光客が訪れており、大陸の中国人観光客のゴールデンルートへの集中は際立っていた。<sup>7)</sup> 映画を契機に、観光地としての魅力が中国に伝えられるようになったことにより、(2009年7月における訪日中国人個人観光旅行の解禁とも相まって、)道東や北海道への中国人観光客を更に増やし、かつ定着させてゆくことも可能かと思われる。その点でも、この映画の影響は極めて大きいものであったといえる。

### なぜ日本、それも北海道の道東が、映画後半の舞台になったのか？

馮監督は、CCTV収録の番組において、以下のように語ったという<sup>8)</sup>。

①馮監督は交友関係のある人物の紹介で、1990年代東京から釧路へのフェリーで北海道を訪れたことがあり、その風景に非常に感動した。その後、ある人物の恋愛話を思い出し、道東を舞台にした恋愛映画を撮影した。

また、映画に本名のままで登場する鄔さんは、2009年7月11日に中国で行われた「日本FANS大集合」のイベント会場において、以下のように語っている<sup>9)</sup>。

②鄔は馮小剛監督と長年の知り合いで、馮監督が「夜宴(女帝 エンペラー)」(2006)のプロモーションのため来日した際、監督とともに北海道に観光に行った。監督に「北海道はどこが一番美しいか」と訊かれ、鄔は「知床」と答え、自ら運転をして監督を案内した。その際、いろいろと話をするうちに、映画のストーリーの輪郭が現れ、映画の中の葬儀、教会、海鮮すき焼き、四姉妹などの構想も次第に浮かび上がってきた。

①と②の整合性がやや分かりにくいのが、おそらくは、監督は1990年代すでに道東に行き風景に感動していたが、②の段階でそれが道東での映画撮影の計画として結実し、また具体化されていったということなのであろう。いずれにしろ、監督は実際に日本やその北海道の道東を見た上で、この映画を企画し、脚本を書き、制作をしたということがわかる。

### 映画の画像は日本をどう写しているか

むろん画面に映るものを一々挙げるのは不可能だが、参考までに例を挙げると、例えば、能取岬(日射しの当たり加減で、日の当たっている部分と影の部分とがあり、とても美しい。)と青々とした海

単線の線路と1両編成の小さな列車、片田舎のひなびた小さな駅(北浜駅)、その前に広々と広がる海

広々とした畑や林の緑に囲まれた道路

寺院(厚岸町国泰寺)

阿寒湖温泉号郷のひなびた趣の町並み(ところどころ、「四姉妹居酒屋〔「浜っこ」がロケで使われている。〕』のような食事処やスナックなどがある。)

高級日本旅館(阿寒湖畔の「あかん鶴雅別荘雛の座」など)

最近の中国映画に描かれた日本像・日本人像について (1)

淡紅色の夕映えとそれを映した阿寒湖一带の景色  
夕暮れも終わらんとする頃のかかなり暗くなった阿寒湖と、それを間近に見る露天風呂(籬の座)  
夕暮れも終わろうとする頃の、消え残った淡紅色の夕映えとそれを映した阿寒湖の湖面  
車窓から見る周囲一面黄色く色づいた林  
車窓から見る一面のひまわり畑(朝日ヶ丘公園一带)  
周りに何も無い広々とした片田舎にある小さな教会(斜里教会)(時間の推移とともに角度も色も微妙に変わってくる日射しを浴びて、とても美しい。)  
湖畔の赤く色づいた木々  
深い霧におおわれた神秘的な湖(摩周湖)  
林の中の雨に濡れて黒くなった道、単線の鉄道の踏切(雨に濡れた趣がまた美しい。摩周湖付近、釧網線との交差点。)  
広々とした草原から見える青い海  
車窓から見る夕映えを帯びた湖  
林の中に木々に囲まれた知床の露天風呂(木々は色づき、日射しが木々の隙間から地面にこぼれ、美しい。)  
知床の青青とした海と緑の林(知床野営地付近)  
夕日を浴びた能取岬(夕映えでうっすらと色が変わった空と、夕日を浴びた笑笑らが美しい。)  
広々とした海に囲まれた明るい(時間帯に撮影した)岬(能取岬)  
知床の美しい林の中の夜の露天風呂(岩尾別温泉露天風呂)  
宿泊した場所の日本旅館風の室内(日本旅館の客室のように見えるが、知床グランドホテル北こぶし。)  
まだ薄暗い(しかし海はすでに青い)早朝の能取岬  
斜里病院(斜里町国保病院)  
緑の中の、どこまでも真っ直ぐな、しかし起伏が激しく上下のうねりのある道(大空町)などが描かれている。写されている風景うちのほとんどが非常に美しい。  
日本で撮影しているので、映画の中では当然、日本的な生活様式や建物なども描かれている。一々それを挙げることは到底不可能だが、例えば、以下のようなものがある。  
露天風呂(数回出てくる。いずれも非常に美しく写されている。)  
高級な日本旅館(調度なども含めた室内、外観、食事処、露天風呂、浴衣姿、従業員の和服姿など、いずれも日本的である。室内・露天風呂・浴衣姿など、日本的なものを、独特で異様なものとして批判的な視線で写すのではなく、日本的に「美しく」写しているのが特徴である。なお、屋内で靴を脱ぐ習慣、腰掛けず床にじかにすわる習慣、畳の上に布団を敷いて寝る様子なども、映画の中で見て取ることができる。)  
居酒屋(外に提灯がかけられ、木の格子の引き戸に暖簾のある四姉妹居酒屋。四姉妹ら女性店員はみな着物を着ている。なお、秦奮・鴈・笑笑も浴衣のままこの店に来る。この田舎っぽくうらぶれたところのある居酒屋についても、人情味のある話のなかで使っており、悪い描き方はし

ていない。四姉妹や店にいた日本人の男などは、人情味ある感じの日本人に描かれているし、むしろ酔って人に絡むような感じの悪い日本人が登場するといったこともない。

日本風の寺（厚岸町国泰寺）やそこで行われる葬儀（ただし、この場合、日本風・日本式であるということに重点があるのではなく、あくまでも、やくざの葬儀だということに重点がある。）

また、明らかに、あえてアップして撮影した日本的な生活様式もある。あえてアップして撮影したものの場合は、確実に、珍しく感じてあえて写しておきたかったというものであろう。例えば以下のものがそれである。

(72) 屋内に上がる時に靴を脱ぐ。(寺で靴を脱ぐ3人の太ももあたりから下のみが、アップされて写される。)

(76) 旅館「雛の座」の和服を来た女性従業員（仲居さん）が持ってきた深いお盆のようなものに、丁寧に整えて入れられた芸術的に美しい浴衣・帯・タオル・下駄の類（あえてアップして、人物抜きでこれだけ写されている。）。)

なお、アップで写されているわけではないが、この時、仲居さんはゆっくり歩いて部屋の中に入ってきて、正座して、丁寧に「ごゆっくりおくつろぎください」と言って、上述のお盆を置き、両手を膝の前の畳について、畳につきかけるぐらいまで深深と頭を下げる。この動作を写すことは、ストーリーの展開上、本来不要なものであり、これも、日本的で珍しく、礼儀正しくかつ美しく、あえて写そうと意図して撮影したものであろう。

これらについて、エキゾチックで異様なものとして批判的に撮っているのではなく、明らかに、見て美しいもの、礼儀正しく好ましいものとして撮影しているといえる。

2006年7月～2007年3月に日本国際観光振興機構（JNTO）が行ったアンケート調査（『JNTO 訪日外客実態調査2006-2007〈満足度調査編〉 2008年3月発行 30ページ）によると、日本から帰国しようとする中国人旅行者に、訪日前および訪日後の日本に対するイメージについて、16にわたる項目についてそれぞれ該当するかどうか質問したところ、「サービスが良い」「日本人々が礼儀正しい・親切」の2項目については、それぞれ17.2%（16項目中3位）、16.2%（16項目中4位）の中国人が訪日前にそのようなイメージをもっていたと回答し（16項目の平均値は9.6%）、また、それぞれ26.2%（16項目中1位）、22.0%（16項目中3位）の中国人が、訪日後の調査時点においてそのような印象をもっていると回答（16項目の平均値は11.3%）している。やはり中国人は、日本・日本人について、サービスがよい、礼儀正しいと考えており、実際に日本に来ると、更にその印象を強めるという傾向がある、ということが見て取れる。<sup>10)</sup>

この映画の上記のシーンにおける、日本旅館のサービスがよくその従業員が礼儀正しい様子も、日本のサービスのよさや日本人の礼儀正しさは、もともと中国人が一般的に日本・日本人に対して持っているイメージであるが、実際に日本に来てみて、思っていた以上にそうであることを知り、それを伝えたいと思って写したシーンであろう。

(77) 生の卵をかけて食べるうに丼（うに丼に生卵がかけられる場面が、人物抜きのアップでもわざわざ撮影されている。横にはわさびがある。)

## 最近の中国映画に描かれた日本像・日本人像について (1)

秦奮は一口食べると、ひどくまずそうな表情をして、「腥(生臭い)」と言う。そして、「刺激(刺激的だ。つまり、わさびで辛い。)」という。たくさんのわさびの入った生臭いうに丼(近年では寿司も中国に入っているものの、中国ではもともと生ものを食べる習慣がない。むろんわさびも中華料理にはない。)、更にそれに生の卵をかける(中国では卵を生で食べる習慣はない。)というのは、普通の中国人にはかなり衝撃的な食べ物かもしれない。なお、映画に本名のままで登場する鄔によると、うに丼に生卵を入れるのは珍しいが、いいシーンを撮るためあえて入れた、中国人スタッフは誰も食べる勇気がなかった、という。)11)

### (82) 四姉妹居酒屋の場面

四姉妹居酒屋の場面においては、秦奮や鄔らと、人情味があり親しみやすい日本人とのくだけで堅苦しきのない、自然で楽しげな交流が描かれている。店には、人を笑わせ場を盛り上げるためのひょうきんな大きな鼻・眉毛つきのメガネや滑稽なちょんまげのかつらもある。店にいる男(日本人)は、「(秦奮や鄔らは)騙されたよーん」などと言って、二人をからかいもする。

2005年10月～12月に日本青少年研究所が中国など4カ国の高校生を対象に行ったアンケート調査(『高校生の友人関係と生活意識調査報告書』2006年3月発行 46ページ)によると、中国の高校生に、日本人についての印象について、20にわたる項目についてそれぞれ該当するかどうか質問したところ、「人情を重視」「親しみやすい」「陽気な」「冷たい」の4項目については、それぞれ16.9%、16.1%、16.6%、46.1%の中国人高校生がそのような印象をもって回答している。(20項目の平均値は31.4%だった。)これは反日デモから半年ほど後の調査であり、そのため「冷たい」がとりわけ多くなり、「人情を重視」「親しみやすい」「陽気な」がとりわけ少なくなっているものと思われるが、そうした面を差し引いて考えるとしても、やはり中国人は、日本人について、冷たく陰気で、人情や親しみに欠ける、と考える傾向が強い、と考えるべきであろう。

そうした中、この映画の四姉妹居酒屋の場面で描かれた日本人の人情や親しみやすさは、特筆すべきものと思われる。

なお、『高校生の友人関係と生活意識調査報告書』56ページによると、日本渡航経験のある中国人高校生は、「人情を重視」「親しみやすい」「冷たい」の3項目については、それぞれ26.1%、28.3%、37.3%の学生が日本人にそのような印象をもって回答している。日本渡航経験がない中国人高校生に比べ、「親しみやすい」「人情を重視」の数値が大きく増加しており、「冷たい」の数値も明らかに減少している。監督は、来日して北海道旅行をした際に四姉妹居酒屋の場面を思いついたということであるが(前述)、日本に来て日本人と接触する中で、もともと思っていたより日本人は人情があり親しみやすい(そしてひょうきんな部分もある)ということを感じ、そうした印象があってこそ、四姉妹居酒屋のような場面を思いついたのであろう。

### 国の違いについての意識について

映画には、日本や日本人そのものについて述べているわけではないが、どの国に所属するかと

いうことに関わる登場人物の意識が間接的にはあるが反映された会話シーンがある。以下がそれである。

(72)

秦奮は梁笑笑とともに鄔の運転する車に乗っていたが、ある街で道路沿いの寺院（ロケ地は厚岸町国泰寺）に目を留め、参拝したいと言い出す。いったん寺側に断られるが、どうしても参拝したいと言う。その際、以下のような会話が交わされる。

笑笑：「しかも、日本の仏様はあなたのことを管轄できないわ。（再说这日本的佛也管不了你的事啊。）」

秦奮：「いい加減なこと言っちゃいけない。仏様がどんな国境を分けるっていうんだ。北海道は俺にとって幸せな場所だ。仏を見たら拜めば、絶対悪かろうはずがない。（别乱说！佛分什么国界啊？北海道是我的福地。我见佛就拜肯定错不了。）」

むろん笑笑だけでなく秦奮も自分が中国人であることをはっきりと意識している。しかし秦奮は、少なくとも、仏のもとでそれが区別されるようなものではないとはっきりと考えているのであろう。これは当たり前といえどごく当たり前のことではあるのだが、こうした意識は、彼が四姉妹居酒屋で日本人と自然に付き合いその中に溶け込んでいるといったことにも、繋がっているように思われる。もちろんそこには、脚本を書きこの映画を制作した監督の意識も反映されているよう。

#### 登場人物は、日本人の特徴についてどう述べているか

この映画には、登場人物が日本人の特徴について述べている箇所がある。では、そこでは、日本人はどのような特徴をもっていると述べられているのだろうか。

それは以下の箇所に見られる。

(98)

熊が出ると言われている山の奥深い温泉に、秦奮・梁笑笑・鄔の三人がいる。そこに日本人登山客二人が山を下りてやってくる。そこで以下のような会話が交わされる。

秦奮：「鄔桑，你问问他们看见熊了吗？（鄔さん，彼らに熊を見たかちょっと訊いてみて。）」

鄔：「このあたり，熊がいる？」

日本人：「熊？ 行きは四人いたんですけど，帰りは二人だけになっちゃって。」

秦奮：「他们说什麼呀？（彼らは何と言ってる？）」

鄔：「他们说，进山的时候，他们是四个人，出来的时候，只剩他们俩了。（彼らは，山に入った時，彼らは四人だったけれど，出て来た時，彼ら二人しかいなくなっちゃった，と言っている。）」

秦奮：「(本気にして。) 啊 (あー)」

日本人：「(笑い。この時，梁笑笑も笑う。) いるわけないでしょう。うそですよ。信じたんですか」

秦奮：「谁说日本人没幽默感？ 也一点正经没有。（日本人がユーモアがないなんて誰が言ったんだ。僅かばかりの真面目さもないじゃないか。）」

以上の会話から、以下のことをうかがい知ることができよう。

中国では、一般には、日本人は生真面目でユーモアや面白みに欠けると思われている。（少なくとも秦奮は一もちろん脚本を書いた監督も一、中国人は日本人についてそう思っていると考えている。）しかし、実際に日本人に接した秦奮一脚本を書いた監督もそうであろうが一は、中国人の間において一般的なそうした見方は必ずしも当たってはいないと思った。

なお、2005年10月～12月に日本青少年研究所が中国など4カ国の高校生を対象に行ったアンケート調査（『高校生の友人関係と生活意識調査報告書』2006年3月 46ページ）によると、中国の高校生に、日本人についての印象について、20にわたる項目についてそれぞれ該当するかどうか質問したところ、「礼儀正しい」「規則を守る」「冷たい」「親しみやすい」「陽気な」の5項目については、それぞれ49.6%、43.9%、46.1%、16.1%、16.6%の中国人高校生がそのような印象をもっていると回答している。（20項目の平均値は31.4%だった。）これは反日デモから半年ほど後の調査であり、そのため「冷たい」がとりわけ多くなり、「親しみやすい」「陽気な」がとりわけ少なくなっているものと思われるが、そうした面を差し引いて考えるとしても、やはり中国人は、日本人について、生真面目ではあるが面白味や親しみや陽気さに欠けとつきにくい性質だと考える傾向が強い、と考えるべきであろう。ところがこの調査報告書56ページによると、日本渡航経験のある中国人高校生の場合、例えば「親しみやすい」は28.3%まで大幅に数値が上がり、「冷たい」は37.3%まで数値が下がるという。

秦奮や監督は、日本に来て実際の日本人に触れて、中国人が日本人について抱きがちな、生真面目だが親しみや面白味に欠けるというイメージは正しいものとはいえない、と思ったのであろう。

その他、日本人の特徴について直接述べたものではないが、登場人物である秦奮（あるいは脚本を書いた監督の）日本人についての見方がうかがわれる箇所がある。それは以下の箇所である。（69）

鄔が秦奮らを北浜駅まで出迎えに来てくれた時（日本が舞台となる最初の場面）、秦奮は鄔さんに（冗談交じりにからかうように）言う。「乍一看真像是北海道农民，就是眼神比日本人贼一点儿。（一目見ただけでは、本当に北海道の農民のようだね。ただ目つきが日本人よりちょっと賊（ずるがしい、よこしまだ、といったような意味の形容詞）だけれどね）」

中国人がその目つきは日本人の目つきより「賊」であるという言い方をすることは、一般的なことではない。もちろん秦奮の言葉は、親友間の親しみのこもった軽い冗談にすぎないのだが、ただこのようなせりふは、やはり監督が、あるいは日本に来て、中国人の目つきは日本人のそれよりも「賊」であると感じたからこと思いついたものであろう。確かに、日本人の目つきより中国人の目つきの方がすどく精悍で逞しく力強くずぶとく見えるというような傾向はあるかもしれない、おそらくそうした特徴を別の角度から述べた言葉ということなのだろう。

中国において日本人を描いた映画のうちのかなりの比率のものは、抗日戦争期を舞台とした映画であるが、そうした横暴で残虐な（場合によっては狡猾でもある）日本人が多く出てくる映画と比べると、当然、舞台となる時期が全く違うという前提もあってではあるが、日本人が中国人ほど「賊」でないというこの映画は、非常に異色のものに思われる。

### 登場人物たちと日本人との関わり方

日本に長く住んでいる鄔はもとより、主人公の秦奮も、四姉妹居酒屋においても、二人の日本人登山客と逢った熊の出没するという地においても、（あるいは、寺に入った件もそうと言えるかもしれないが、）何人だからということで接し方・付き合い方を変えることをほとんどせず、さながらほとんど国を意識していないかのように自然に接することができる。とりわけ、四姉妹居酒屋において、彼らのそうした性格がはっきりと表れている。

また、映画に描かれた日本人（とりわけ四姉妹居酒屋にいた人たちや、二人の登山客）もまた同様に、登場人物の中国人にごく自然に接している。

この映画においては中国人と日本人は、さながら国籍の違いなど意識していないかと思われるほどに（もちろん意識していないわけではないが。）お互い自然に接し、溶け合っている。お互い自然のうちに同じ人間として接し、非常に友好的な関係が自然のうちに形成されている。中国人と日本人とのここまで自然に溶け合った関係が中国映画に見られることは珍しく、この映画は、中国人と日本人とが真の意味での友好関係を築くうえで大いに役立つような作品であると言える。

## 2 『色 | 戒 (ラスト, コーション)』 (158分, 中国版は過激なベッドシーンをカットした140分)

米・台・中 2007年

監督：アン・リー（李安。台湾）

主演：湯唯（唯一の大陸俳優）、トニー・レオン（梁朝偉。香港）

原作は、1950年に張愛玲が執筆した小説『色・戒』。

### 内容

抗日戦争中、日本軍の占領下に置かれていた香港と上海を舞台に、日本の傀儡政権である汪兆銘政権の特務機関員・易の暗殺を任務とされた女性スパイ王佳芝と、暗殺対象とされた易との間に芽生えた愛情の行方を描いた作品。仲間とともに易の命を狙う王佳芝であったが、ようやくその機会が訪れた時、彼女は易を逃がす。暗殺計画に参加していた彼女は、仲間とともに捕らえられ銃殺される。

### 日本・日本人はどのように描かれているか

この映画において描かれた日本・日本人は、むろん侵略者としてのそれである。

最近の中国映画に描かれた日本像・日本人像について (1)

何らかの意味で日本や日本人に関わる箇所としては、具体的には以下の箇所がある。なお、○の後の ( ) 内の数字は、中国版における冒頭からの分数。

① (1~2)

マージャン卓を囲んで、「麦夫人」こと王佳芝が、易夫人ら汪精衛政権の高官の奥様方と話をしている場面における会話：

易夫人：「麦夫人は分からなくなってしまい、汪精衛政権の官はすべて私たち奥様方がマージャン卓上で割り当てていると思ってしまっていますわ。(人家麦太太弄不清楚了。以为汪里头的官都是我们这些太太们牌桌上派的呢。)」

(「麦夫人」：「それはもちろんその通りですわ。(那可不就是嘛。)」)

易夫人：「日本人は思いもしないでしょうね。天皇の上に、更に天があるなんて。(这些日本人可没想到哟。天皇头上也还有个天嘛!)」

(奥様方の笑い)

ほんの軽い冗談にすぎない会話であり、明確な日本批判といったものでは決してないが、軽い冗談がてらながら、天皇やそれを崇める日本人をからかい皮肉っている言葉である。

② (9)

車に乗った王佳芝が車窓から見る光景：

街角で、中国人が長い列を作って1列に並んでいる。銃剣を携えた多くの日本兵が、その列に沿って物々しく立っている。中国人たちは、日本人将校の前まで来ると、(帽子を着用している者は必ず帽子を取り) 頭を下げ、一人ずつ列を進んでゆく。一人の中国人が、日本兵によって全身のボディ・チェックをされている。

何でもめたか、ある中国人が二人の日本兵に激しく怒鳴られ、足を蹴られ、下へ向けて思い切り力づくで小突くようにして押し倒されている。(王佳芝は憎しみのこもったような目でそれを見、そして目を背ける。)

また、食糧配給に並ぶ外国人の列もある。運転手は王佳芝に、「あの外国人たちは1日に20元しかもらえず、硬いパンしか食べられません」と言う。

以上において、日本軍の横暴で暴力的な恐ろしい様子、日本の侵略戦争により人々の生活が苦しくなっていること、などが描写されているといえる。

③ (64~68)

当時の社会情勢を表す場面。以下の光景が現れる：

a 橋で検問する多くの日本兵と、軍人を満載した日本軍のトラック (なお、橋で検問する多くの日本兵と日本兵を満載したトラックは、104分目の箇所にも出てくる。)

b 血を流し路上に倒れたままの遺体

c 食糧の配給を受けるため行列を作り並ぶ人々と、その横を、銃剣を携えて通り過ぎる日本兵

d 飢えて憔悴した路上にいる人々、及び、そのなかで、動けなくなって (死んで) 赤十字の人たちに台車で運ばれてゆく人々

e 王佳芝が学校で日本語を学んでいる場面：

日本人の日本語教師は、日本語の複雑な文法を教える際、「日本人というものは、ずいぶんと頭を使っているということがわかります」と言っている。

(実は、上の文は、中国語字幕では、「日本人说话的用语是根据对象而不同。〔日本人が話す際の言葉の使い方は、対象により異なっている。〕」となっており、もとの日本語のように中国人の反感を買う文ではなくなっている。しかし、上の文は、日本語教師が話す言葉のすべてとあってよいものであり<sup>12)</sup>、この映画は、意図して日本語教師にこのようなことをを言わせ、日本人の自らの民族に対する理不尽なまでの尊大さ・傲慢さや、その裏返しともいえる中国人（など他国民・他民族）に対する露骨な差別意識を強調しようとしているといえそうである。

f映画館で、洋画のあと、日本の国策宣伝ニュースが流される場面：

ニュースの内容は以下のようなものである。「现在正是节节胜利的时候。过去的五百年间，饱受了英美的压迫。全亚细亚民族到了现在，方才挣脱了锁链得到了自由。亚细亚正要回到亚细亚人的手里。（今はまさに次々に勝利していく時である。過去五百年間、さんざん英米に圧迫されてきた。すべてのアジアの民族は、ようやく枷を振り切って自由を得た。アジアはまさにアジア人の手に戻ろうとしている。）」

つまり、日本が映画館までも使って、国策を宣伝しようとし、欧米の支配に代わってアジア人による新秩序をアジアに樹立するという大東亜共栄圏構想（つまり口実を作って日本の侵略を正当化しようとするもの）のニュースを流していたことを描写している。

なお、この場面で、多くの中国人が怒って席を立ち、王佳芝も憎しみの目でニュースの画面を見たり、そこから目を背けたりする。

#### ④ (104~106)

日本料亭での場面：

1階には洋風のダンスホールがあり、ダンスが行われているが、そこから中国人の若い女を連れて同伴で出て行く日本の軍人がいる。

料亭には靴を脱いで上がる。木の廊下、畳の和室、襖、障子、床の間、座布団などがあり、日本人が見てもおかしくない和風のつくりになっている。おかみや案内係の女性などは、日本人が演じており、日本の料亭式の丁寧な案内・接待・しぐさをしている。彼女たちや芸者たちの和風の服装も、日本人が見ても全くおかしくない完全に日本式のものである。

二階は完全に日本式の日本料亭。王佳芝は、あるかなり酒の入り鼻の赤くなった軍人に、ろれつの回らなくなった口調で、「いい女じゃないか。……よしよし。……よし。おまえもここへ来てな、大佐殿のお酌しろ」と礼儀も何もなくなれなれしい調子で声をかけられ、腕を引っ張って部屋に引きずり込まれそうになる。部屋では、酔った日本の軍人たちが、軍服を着たまま、芸者を呼んで遊んでいる。軍人たちは酔ってかなり乱れている様子で、好色に見える。芸者たちが踊りつつ古い日本の歌を歌ったり、軍人たちに酌をしたりしている。

日本の軍人が好色で横柄で厚かましく、まさしく紳士の対極にあるような存在として描かれている。

①の会話内容、②、③のaからfまですべてのシーン、④のいずれも、原作の小説には存在し

ない。

(なお、②や③のcdに描かれたような物資の窮乏に関わる箇所としては、原作には、「抗日戦争中、後方地域と日本軍によって占領された地域は、どこも物資が不足していた。(抗战后方与沦陷区都缺货。)」<sup>13)</sup>とのごくそっけない簡単な一文があるだけである。それに対し、②や③のcdは、日本の侵略戦争によって人々の生活が苦しくなったことを明確に描写したものであるように思われる。)<sup>14)</sup>

原作は日本批判のはっきりと表れた作品ではなく、国家意識や政治意識・社会意識の希薄な、もっぱらスパイのスリリングな愛欲・恋愛の心理に意識の集中した作品だったが、映画は日本批判を明確に打ち出した作品になっているといえる。

この映画は、原作の小説に比べ日本批判の色彩が強まった作品である。しかし、この映画の重点は日本や日本人を描くことにあるわけではなく、しかもこの映画は事実と明らかに異なるというような反日的シーンを描いているわけでもないので、この映画を、事実を歪曲した反日的映画などというべきではない。

ちなみに、和久田幸助は、当時の日本軍について、以下のように記している。主として香港での話ではあるが、日本人による占領地の記録であり、以下に引用してみる。当時の日本占領下の中国の人々が、大虐殺や戦争による直接的被害などに遭わなくとも、現実に日本軍のためにいかに大きな苦難にさらされたか、その一部が日本人自身の記録からもはっきりと見て取ることができる。

「広州でも香港でも、日本軍の占領した都市では、街の角々にバリケードがきずかれ、銃剣を持った憲兵が立哨していて、そこを通る総ての中国人は、いちいち深くおじぎをしなければならなかったし、怪しまれば身体検査も受けなければならなかった。

もちろんゲリラを警戒してのことだったが、おじぎをしなかったとか、態度が悪かったという理由で、憲兵にこっぴどく殴られる中国人が多く、この一事だけでも、中国人の誇りをひどく傷つけていた。

胡蝶は、二台持っていた自家用車を、日本軍に徴発されてしまったこともあって、自宅から一歩も外出しなくなっていた」(以上、和久田幸助『梅蘭芳と胡蝶』『文藝春秋』昭和40年10月号より。和久田『続続・私の中国人ノート』講談社1982年にも転載。)

「(日本占領下の)香港の住民たちが、一番困ったのは、食料と米だった。

香港政庁と英軍は、当時、三百万の住民をかかえて、長期の抵抗を予想してか、倉庫の他に、大きな映画館や劇場まで米倉に当て、大量の米を備蓄していたのだが、日本軍は、香港を占領すると、その米倉という米倉を、全部押えてしまい、街には一粒の米も出ないようにしてしまった。

金も同様だった。日本軍は市内のあらゆる銀行を封鎖してしまったので、住民たちは、銀行から金を引き下ろすことはおろか、貸金庫に入れておいた貴重品や宝石類を取り出すこともできなくなったのだ。その上、日本軍は、一片の、一方的な布告を出すと、勝手なレートを立て、香港幣を軍票に切りかえたため、大多数の住民たちは、食糧も金も皆無という、ひどい状態に突き

落とされてしまったのである。

(中略)

占領前から香港に住み、中国人の中に幾人かの知人を持っていた私には、そういう彼らの苦難な日常が、手に取るように判り、日本軍当局は、なぜ、占領地の住民たちの生活を、少しは考えてみないのだろうか、心外に堪えなかった。

そのくせ、街に張り出された布告には、『兄弟牆に闘ぐの愚をやめ、日支合作し、大東亜の建設に邁進しよう』などと大書されているのだから、中国の人たちが、それを見たら、どう思うだろうか、その方が心配だった。(以上、和久田幸助「わが友・薊先覚」『サッポロ〔サッポロビール随筆誌〕』1970年1月より。和久田幸助『私の中国人ノート』講談社文庫1979年にも転載。)

以上のような証言を見ると、この映画で日本や日本人が批判的に描かれていても、それは当時の日本の実態にかなり即したものであるということが分かる。

#### 易と日本軍の関係はどう描かれているか

なお、易と日本軍の関係を表す場面としては、以下の場面がある。

##### A (4)

易が監獄らしき場所の廊下において、彼を「部長」と呼ぶ部下と交わす会話：

部下：「彼ももうそろそろでしょう。(日本の)憲兵隊は必ず引渡しを求めてやって来ます。(我看他差不多了。宪兵队一定会来要人。)」

易：「彼らは生かして引き渡せとは言っていない。始末しろ。(他们没有说要死的活的，给他一个痛快。)」

部下：「では三浦のところにはどう説明しますか。彼らはアメリカ人が重慶に渡した武器の行く方を追っています。(那三浦那里怎么交代？他们在追查美国人给重庆那批军火。)」

易：「晩に私は彼と会う。(晚上我会跟他见面。)」

部下：「彼の秘書が電話をしてき、今日の晩餐は取り消しと言っていました。明日早く直接憲兵隊本部に行って彼に会えということです。(他的秘书来电话，说今天晚餐取消。要你明天一早直接到宪兵部见他。)」

日本の傀儡政権である汪精衛政権の特務(スパイ)易と日本軍の間には、決して信頼関係があるわけではなく、微妙な関係にあり、また、日本軍は易に対し疑念をもち、かつ彼に対し高飛車な態度を取っているのではないかと思わせるシーンである。

##### B (94~95)

王佳芝がそっと易の部屋に行くと、明かりを消したその暗い部屋には、孫文の写真が何枚も貼ってあり、易はそこで多くの書類を焼いていた。(おそらく残してはいけぬ機密文書を焼いて証拠隠滅をしていたのだろう。)

##### C (101)

秘密工作員呉と鄭裕民と王佳芝が呉のアジトで話している場面での会話：

呉は言う。「彼(易)は我々の情報網を破って、米国側が我々に提供した先進的な武器を奪い去った。……奇妙なのは、日本人もそれらの物の行く方を捜しているということだ。(他突破我们的情报网, 把美方提供我们的一批先进武器弄走了。……奇怪的是日本人也在找这些东西的下落。)」  
D (107)

日本料亭で易が王佳芝に話す言葉：

「彼ら(日本人)が歌を歌っているのを聞いてごらん。泣いているように聞こえる。家を失った犬のように聞こえる。鬼子(外国人—つまりこの場合、日本人—に対する憎悪を込めた呼称)は麻を断つかのように人を殺すが、実のところ心の中では誰よりも恐れている。状況がどんどん悪化し、アメリカと開戦して、終わりはまだ目前だということを知っている。厚化粧の人たちと、まだ調子はずれに歌を歌っている。(你听他们唱歌。像哭!听起来像丧家之犬。鬼子杀人如麻, 其实心里比谁都怕。知道江河日下, 跟美国人一开打, 就快到底了。跟着粉墨登场一班人, 还在荒腔走板得唱戏呢。)」これは痛烈な日本批判の込められた易の言葉である。

なお、原作においても、易が日本が戦争に敗れることを十分に分かっていることを示す文そのものはある。しかし、それは以下の一文だけである。「俺は戦局を楽観視していないし、自分の将来にも覚悟はできている。たった一人、心を通い合わせる女性がいれば、死んでも後悔はない。彼女の影が永遠に俺のそばにいてくれて、慰めてくれるだろう。[他对战局并不乐观。知道他将来怎样? 得一知己, 死而无憾。他觉得她的影子永远会依傍他, 安慰她。]」<sup>15)</sup> 易の、自分が銃殺させた王佳芝に対する想いを描写した部分であり、日本批判の文脈には全くない。

ABCDを合わせ見ると、易は日本の傀儡政権である汪精衛政権の特務(とりわけ「3年後」つまり1942年の場面ではその長官になっている。)であるとはいえ、実は日本に対して批判的であり、日本の敗北を確信してもおり、かつ、本当のところは日本に対し協力的ではなく、日本の思惑の通りに動いてはおらず、日本に対しては秘密を漏らさぬようにしつつ密かに何か画策をしている(少なくとも、日本には隠して密かに武器を入手している。)ということが見てとれる。日本の敗北を見越して、その後に備えているのかもしれない。(王佳芝はむろん、そうしたことについてほとんど理解してはいないようであるが。)

実は、これらABCDいずれのシーンも、原作の小説には存在しない。

原作は、易と王佳芝二人の心理や愛に圧倒的に関心を集中させて書かれた作品であり、国家意識・政治意識・社会意識といったものははっきりとは見られず、侵略者である日本を描くこと自体にも、ほとんど関心を向けてはいない。それに対し、映画は、侵略者日本を描くことに少なからぬ関心を向けている。映画の方が明らかに原作よりも、易と日本軍との間に疑心や確執があり真に関係がよかったわけではないことを強調しているし、また、日本人の冷酷さやその将来を批判的に書いている<sup>16)</sup>。

## 王佳芝らの演ずる愛国劇についてはどう描かれているか

### 愛国劇 (15~16, 18~22)

愛国劇に関わる場面は、鄭裕民が、「皆それぞれが抗日のために力を尽くさなければならない。

軍人は前線で命がけで敵を殺している。香港島の人間は、それなのにゆったりと暮らしている。私たちはどらや太鼓を鳴らして彼らの目を醒まさないといけない。〔毎一个人都应该为抗日尽一份力量。军人在前线拼死杀敌。香港岛上的人却优游过活。我们要敲锣打鼓把他们叫醒。〕』と言って、王佳芝ら女学生に、ともに愛国劇をするよう呼びかける所から始まる。そこから実際に愛国劇をやることになり、更にそれが易に対する暗殺計画へと発展するまで、映画の一定の時間と場面とを使って描かれており、言い換えると、それがストーリー全体の中の一部となっている。

劇の内容は以下のようなものである。

劇においては、王佳芝が劇の主人公である娘を演じる。その母は、家で病床についている。息子つまり劇の主人公の兄一が、抗日戦争において命を落としたことがその原因であった。そこへ傷ついた士官が担がれて来る。救ってもらった士官は、娘に心からの礼を言う。娘は、士官に向かって地にぬかずき、「私は地にぬかずいてあなたにお願いします。国家のために、私の亡くなった兄のために、民族の万世万代のために、中国は滅びてはいけません！〔我向你磕头。为国家，为我死去的哥哥，为民族的万世万代，中国不能亡！〕』と叫び、劇は終わる。身近な逸材によって愛国・抗日を訴える劇である。観衆は感極まり、みな立ち上がって「中国は滅びるわけにはいかない！〔中国不能亡！〕』と叫ぶ。

なお、原作においては、愛国劇については、僅かに、「(王佳芝が) 学校で演じたのは、やはりどれも慷慨激昂型の愛国史劇だった。広州が日本軍に占領される前、嶺南大学は香港に移転していたが、そこでも一度、舞台に立ったことがある。客の入りは思いのほか悪くなかった。〔在学校里演的也都死慷慨激昂的爱国历史剧。广州沦陷前，岭大搬到香港，也还公演过一次，上座居然还不坏。〕<sup>17)</sup>』と、ごく簡単にあっさりと触れているだけで、愛国劇をするに至るまでの経緯・経過も、愛国劇の具体的内容についても、何も書いていないし、観衆がみな立ち上がって「中国は滅びるわけにはいかない！」と叫ぶ場面も、鄭裕民が抗日戦争で兄を亡くし（またそのために家族に従軍を許されず、）そのため日本に対する抵抗活動を始めたことについても、一切触れることも描くこともしていない。愛国劇に関する部分は必要最低限のごく簡単な説明にすぎず、ストーリーの一部になっているとはいえない<sup>18)</sup>。

やはり単にスパイ間のスリリングな恋愛のみに意識が圧倒的に集中していた原作と比べ、映画の方が、愛国意識・抗日意識が強まっていた当時の社会情勢を明確に表現した作品となっていると言えそうである。

## 注

- 1) <http://zhidao.baidu.com/question/18367091.html>
- 2) 国家広播電影電視総局のデータ。海南新闻网2007年1月6日による。
- 3) <http://sun7771.blog51zhidao.baidu.com/question/18367091.html>
- 4) <http://indus.chinafilm.com> 2009年1月21日中国电影网
- 5) <http://www.douban.com/doulist/226734/>

最近の中国映画に描かれた日本像・日本人像について (1)

- 6) なお、その際、笑笑は「私に付き合っただけ一度北海道に行ってもらえる？〔你能陪我去一趟北海道吗？〕」と言うだけで、「日本の北海道」に連れて行ってくれるかという言い方はしない。
- 7) 『JNTO 訪日外客訪問地調査2007/2008』日本政府観光局編 2009年 p.30～p.32
- 8) ウィキペディア「狙った恋の落とし方」の項
- 9) 東北サイト日本語版2009/7/16 <http://Japanese.dbw.cn>
- 10) 東北サイト日本語版2009/7/16 <http://Japanese.dbw.cn>
- 11) なお、「日本の人々が礼儀正しい・親切」は、「礼儀正しい」と「親切」双方を含んでいるが、JNTOのアンケート調査（上述書85ページ）によると、日本から帰国しようとする中国人旅行者のそれぞれ16.4%、15.3%が、日本の魅力として「人が親切である」「人が礼儀正しい」を挙げている。これらは、日本の魅力としては、計40の選択肢中「清潔」「サービスが良い」「交通が便利である」に次ぐ第4位と第5位を占めており、中国人旅行者が日本の魅力として感じる重要な点であるということが出来る。
- 12) 厳密に言うと、日本語教師は、文法説明のため更に「あなたが」「わたしに」とも言っているが、それは文の体を全くなしていない。
- 13) 南雲智訳。集英社文庫、2007、9ページ
- 14) なお、この映画において戦争によって物不足になっていることを示す箇所は、映画では、上記の②や③のcdの他、実は更に、以下の箇所もある。4分目のシーンにおける易夫人の王佳芝に対する言葉「今の上海はひどい物不足で、石鹼も歯磨き粉も闇市があるわ。今後、ちくちよて来て。来たら泊まる場所もあるしね、そうでしょ？（現在の上海啊、五穷六绝、肥皂，牙膏都有黑市。以后你勤来来。来啦也有地方住，对吧！）」及び、9分目のシーンにおける王佳芝と運転手との会話。王佳芝：「上海は香港より車が少ないわ。（上海车子倒没有香港多啊。）」/運転手：「ガソリンが高いんだ。今は車を持っている多くの人も運転しなくなったんです。（油贵呀。现在很多有车子的人也不开了。）」やはり映画の方が原作より、戦争による人々の生活の窮乏を明確に表現しようとしているように思われる。
- 15) 南雲智訳。集英社文庫、2007、47ページ
- 16) 原作では、易と日本との疑心・確執、ないし信頼なき関係について書かれている箇所は、僅かに、易の心中における以下の言葉に見られるだけである。「（自分が王佳芝を処刑させたのは、）やむをえなかったのだ。日本軍憲兵隊は二の次としても、周仏海自身もスパイ工作を行っていて、内政部を常に附設機関と見なし、今は、ほかでもないこの俺に目をつけている。易公邸の上客が実は刺客の協力者だったということが外に漏れでもしたら、いったいどうなるか？ 諜報機関の責任者がこんな間抜けなことをして許されるはずがない。（当然他也是不得已。日军宪兵队还在其次，周佛海自己也搞特工，视内政部为附设机关，正对他十分注目。一旦发现易公馆的上宾竟是刺客的眼线，成什么话，情报工作的首脑，这么糊涂还行？）」「（妻には以下のことを言って、注意しておかなければならない。）麦太太がここにやって来て間もなく、ある情報を得て、疑わしいと思い、尾行をつけたところ、重慶側の諜報組織を発見したこと。調査中にまた情報が入って、日本軍憲兵隊も風聞をキャッチしたらしく、予定を早めて行動に出たこと。さもなければ、功を横取りされてしまうだけでなく、妻の関係が利用されたことが明るみに出ると、この俺もまづい立場に立たされることなど、妻には十二分にお灸を据えなければならぬ。（她那个“麦太”是家里有急事，赶回香港去了。都是她引狼入室，住进来不久他就有情报，认为可疑，派人跟踪，发现一个重庆间谍网，正在调查，又得到消息说宪兵队也风闻，因此不得不提前行动，不然不大被别人冒了功去，查出是走他太太的路子，也于他有碍。好好的吓唬吓唬她。）」（以上2箇所は、南雲智訳、集英社文庫、2007、47ページ・49ページ）
- 17) 南雲智訳。集英社文庫、2007、21ページ
- 18) なお、原作にも、「（王佳芝は）、香港の多くの人が、国事に全く無関心な態度を見せていたことにも憤りを感じていた。ほとんどの学生の家は広州にあり、香港とは目と鼻の先だったが、亡命者のような気分だっ

た。(香港一般人对国事漠不关心的态度也使人愤慨。虽然同学多数家在省城,非常近便,也有流亡学生的心情。)」(南雲智訳。集英社文庫, 2007, 21~22ページ)という一文はあるが, これは彼女がなぜ易に対するスパイをやるようになったかを不自然でないように説明するために最低限どうしても必要な説明的な文にすぎず, 会話など含めた具体的な場面設定をしての描写などは一切ない。原作においてこの箇所が重要な部分でないことは明白である。